

2) early intervention についての報告

共同研究者 今 泉 岳 雄

< 1 > ERLY INTERVENTION (早期介入) の目的

生物学的、社会的に不利な条件を持つ児に対して、早期から援助を行うことにより、児のより望ましい発達を促す。

< 2 > 我々の意図するERLY INTERVENTION PROGRAM

対 象 ; 明かな障害を持たない2歳前後の未熟児
program 内容 ; 定期的に同じ未熟児を持つ親子が集い、家でもできる遊びを紹介し、親同士の話し合いの中で育児の問題に共感したり支えあい、援助する場を提供する(詳細は別紙参照)。

上記の対象を選んだ理由 ;

- (1) 明かな障害を持つ児はすでに、治療機関と関わっていることが多い。
- (2) それに対し、明かな障害を持たない児はこれまで十分対応されてこなかった。
- (3) しかし、明らか障害を発見されていない児も、将来のLDを予想させるような所見(小児神経学的及び発

達心理学的に)がしばしば認められ、適切な評価や援助が望まれる。

- (4) 未熟児を生んだ親は、明かな障害が認められぬ場合でも、未熟児として生んだ罪障感や育児不安を強く持っている場合が多く、過保護な養育態度をとることも少なくない。したがって、親への援助が必要と思われる。
- (5) 開始年齢を2歳としたのは、言葉も伸び知的な発達が評価しやすく、援助の効果も測定しやすい(将来のより早期の関わりのデータ集め)。
- (6) 自己主張が強くなり、親子の葛藤の生じやすい時期なので、その面でも援助が効果的と思われる。

< 4 > Erly Intervention 実施施設

久留米大聖マリア病院、自治医大(2ヵ所)、埼玉県立小児医療センター、日赤医療センター、東京女子医大、聖隷浜松病院、松戸市立病院の7ヵ所(詳しくは別紙参照)

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

2)early intervention についての報告